

4 科目概要・取り組みと改善点（講義・演習科目）

3年生

科目名	看護のマネージメント	科目責任者名	千葉 美果	対象・開講時期	3年生・前期
実施状況					
<p>看護のマネージメントの授業では、職能集団としての看護管理を学ぶとともに、看護師としてどのように看護管理に参画していくのか（組織・ケアのマネジメント）と、組織の一員として果たす看護師個人のセルフマネジメントについて学習し、臨床や実習に役立てられる知識と技術を構築していくことを目標としている。</p> <p>この授業で大切にしていることの一つは「自己の強みを見つける」ことである。グループワークを多く取り入れ、リーダーシップとメンバーシップについて学ぶとともに、コーチングで用いられる「4つのタイプ分け」テストなどを使い自己の傾向を知り、その結果をどう今後の自己の行動に活かすのか、グループにはどのように貢献できるかを考えられるよう、参加型の授業を行っている。</p> <p>また、付属病院の看護部長を講師に招き、臨床での看護管理の実際についての講義を受け、看護部の取り組みを知るとともに、社会に出てからの臨床での行動のイメージ化に役立てられるよう情報提供（多重課題のDVD鑑賞など）を行っている。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>授業評価での自由意見として、グループワークに関するコメントが一番多くみられ、「面白かった」「いろんな意見が聞けて良かった」などの意見の他、「考えが広まった」「自分の考えを明確にすることができた」というコメントもあることから、参加型スタイルの授業形式を取っていることの意味は理解してもらえたと考える。</p> <p>しかし、『Q7自分で考える姿勢が持てた』に関しては、評価が3.70と一番低く、話し合う内容が授業内で完結してしまい、そのことに関してより深く追及するにまでは至っていないことが明確になった。今後は、グループワークで行う内容やテーマを吟味していく必要を感じている。</p> <p>「Q8この授業の学習の到達目標は達成できた」と「Q9この授業においてシラバスは役にたった」に関しても平均値を下回っており、目標の明確化とシラバスの活用に関しては今後検討を行っていく。</p> <p>現在、看護のマネージメントの授業は常勤1名、非常勤1名の計2名で担当しているため、この授業では何を押さえるのか、どの単元で何を学習してもらうのかを今以上に明確化し、事前の打ち合わせも十分に行っていきたい。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>参加型の授業に関しては学生から好評を受けているため、今後も継続していきたい。また、この授業は3年時に実施される授業であり、授業後には長期間にわたる実習を控えていることから、学生は様々な不安を抱えながら授業に臨んでいる。自己の傾向を知り、セルフマネジメントやレジリエンスを鍛えられる知識をつけながら学んでいくことで、不安の軽減とともに実習を迎える準備期間としてもこの授業を活用してもらえればと考えている。</p> <p>また、シラバスの内容や授業の目標、単元ごとに学ぶポイントを明確にすることにより、学生自らが自分で考える姿勢を持てるようになることを考えるため、自己の間何を実感していけるような方法を工夫していきたい。</p>					
学生への要望					
<p>マネジメントと聞くと堅苦しいイメージがありますが、自分の日々の生活を見回すと無意識のうちにもいろんなマネジメントを行っているはずで、セルフマネジメントは一人一人の成長を助けることに繋がります。自分を知り、自分の強みは何か意識することで、日々の活動も変化してきます。この授業を通し、様々なことを思考し自分自身を成長させていきましょう。</p>					

また、臨床での管理の実際を聞くことができる貴重な機会です。集中して授業を受けてください。

科目名	災害看護と国際看護活動	科目責任者名	湊田 明子	対象・開講時期	3年生・前期
実施状況					
<p>この授業では、災害とか何かを理解することからはじまり、災害看護の特徴と災害看護の基礎知識が学べるように、災害発生時に実際に現場で活躍されている講師を招き講義をしている。トリアージタグを使っての練習や平時と災害発生時の看護の違いについて学んでいる。また、災害が発生するとどのような支援が必要になるのか映画を視聴し、看護だけではなく支援に関わるすべての人の活動などや関わり方を考える機会としている。</p> <p>国際看護活動では、支援の前に世界の貧困・健康問題・紛争などの現状を理解し、その上でどんな援助が必要であるのかを考えられるように授業を行っている。国際的に活躍されている講師を招き世界の現状をリアルに感じられるよう、そして同じ地球上に住む人として何が出来るかを考える授業を行っている。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>学習項目としては大切なことを学べる構成となっていると考え、授業目標に関する評価としては低くなく、大切な学びの機会であったと捉えている様子であった。しかし、授業の進め方においては「Q11 教員の説明は理解しやすかった」「Q13 学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めていた」についての満足度が低い状況であった。事前学習に必要性などを事前に外部講師と詳細に打ち合わせておく必要があると考える。授業評価を外部講師とも共有しながら次年度の改善につなげていきたい。</p> <p>自由記載では、東日本大震災後のDVDを視聴したことについて「一緒に考えられ勉強になった」「理解が深まった」等の意見が複数あり、実習に出る前に生きること死ぬこと、人に対する尊厳について考え、倫理観を養う上で有効であったと考える為、継続していく。</p> <p>国際看護活動では、看護の対象の広がりや視野の拡大につながっていると考える。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>この授業を最後に領域別実習に臨むことになるため、基礎的知識がいかに大切かを学び、人としての尊厳を守ることが看護の大切な役割であることを学べるよう外部講師との打ち合わせを密に行っていく。また、授業後の評価も一緒に行っていけるようにする。</p> <p>様々な感動があった後の共有する時間が持てるよう授業構築を行う。また、レポートからもより実践に近づけられるような課題としていく。</p>					
学生への要望					
<p>災害へ支援にはまず自分自身の身を守ることが大切です。日ごろの防災への取り組みを振り返っておくことが災害看護の理解につながります。また、グローバル化社会を意識して世界で起きていることにも関心を高めておくことを心がけてほしいです。世界で活躍されている先生方からの貴重な講義を受講できる科目です。講義後に自分が感じたこと、考えたことを大切にしてほしいです。</p>					

科目名	成人看護学実習	科目責任者名	丹澤 洋子	対象・開講時期	3年生・通年
実施状況					
<p>看護の対象としての成人を理解し、その対象に応じた看護実践を通して成人看護の特徴について学習した。また、自己の実践した看護を振り返り既習の知識を活用し意味づけを行うことで看護観を深めた。入院患者の状況から、一部老年期の患者(前提として、認知症がなく意思疎通が可能)を受け持つこととなった。カンファレンスや各健康レベルの実習において成人看護を学ぶ機会とした。</p> <p>事例報告会の準備日を1日増やし、自己の看護を十分に振り返り、意味づけをする時間を確保した。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>入院患者の状況から、一部老年期の患者(前提として、認知症がなく意思疎通が可能)を受け持つことと</p>					

<p>なったが、カンファレンスや各健康レベルの実習において成人看護を学ぶことができ、目標は達成された。事例報告会の準備日を1日増やし、自己の看護を振り返り意味づけに時間をとることで、看護観を深めることが出来た。</p> <p>授業アンケート結果より、学習をするうえで適切な教材の提供、実習環境の配慮や適切な指導を受けられたことにより、学生は自分で調べ考える姿勢を持ち、新しい考え方や発想を持つことができ、成人看護に対する基本的な専門知識が得られたと評価している。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p> <p>実習の目標を達成できるよう、成人の特徴と看護が学べるよう受け持ち患者の選択・調整を行う。臨床指導者との連携を図りながら、目標達成に向け学生個々の学習状況に対応した指導を行う</p>
<p>学生への要望</p> <p>これまでに学んだ知識・技術・態度を活用し看護を提供できるよう、十分に準備をして実習に臨んでください。</p> <p>成人期の特徴である、対象の考えや自己対処能力を踏まえた援助を提供していきましょう。</p> <p>看護に関する疑問・自己の課題解決に向け、主体的に行動しましょう。</p>

科目名	老年看護学実習	科目責任者名	鈴木 陽子	対象・開講時期	3年生・通年
<p>実施状況</p> <p>老年看護学実習の目的は「老年期にある対象の理解と自立した生活を支援するための看護の役割を理解する。」であり、介護老人福祉施設（1週間）及び病院（3週間）での実習を行った。介護老人福祉施設実習では、「高齢者の特徴と高齢者を支援する職種間の協働・連携について理解する。」病院実習では、「疾病を持ち治療過程にある高齢者の特徴と療養状況に応じた看護の実際から、看護の役割を理解するとともにソーシャルサポートシステムを理解する。また、高齢者の生活の場を通してQOLを高める援助を実践する。」を目標とした。実習時期は5月から10月までの4クールであり、介護老人福祉施設5施設と病院3施設で実施した。</p> <p>事前学習として実習に必要とする基本知識の学習ノート作成及びレポート課題を提示し、実習開始前に提出してもらい内容を確認した。介護老人福祉施設実習においては、施設毎に現地オリエンテーションを実施してもらい、施設の概要や実習中の注意事項等の説明を受ける機会とした。また、病院実習開始前には、主要な看護技術の技術チェックを行った。</p> <p>介護老人福祉施設実習では、各実習施設での日々の実習反省会と、実習最終日に学内での合同カンファレンスを行い、学生間の意見交換による学習深化を目指した。病院実習は学生各自が1名の対象者を受け持ち、看護過程展開を進めた。実習期間の中盤と最終に、学生と臨床指導者及び担当教員の3者で面接を行い、学生各自の思考していることを確認するとともに主体的な取り組みができるように支援した。そして、実習最終日は実習グループ毎のカンファレンス実施と実習レポートの提出により、学生各自が自己の実習全体を振り返り、学びや課題の整理ができるようにした。</p>					
<p>教員自身の授業評価</p> <p>授業アンケートの平均は4.56であり、項目別回答でも多くの項目が4.5以上であった。最もポイントが高い項目は「Q3 この実習は真面目に意欲的に取り組んだ」4.80、であり、次に「Q4 自分にとって新しい考え方、発想がもてた」4.76、「Q10 実習の受け入れ姿勢は整っていた」4.71、「Q21◎看護観が深められた」4.69、「Q21①社会人として成長できた」4.68、「Q21④看護の機能と役割を理解できた」4.68、「Q22 この実習は全体的に満足できるものであった」4.64と続いた。また、全体のなかで3項目が4.5以下であり、最も低い項目は「Q18 参考文献等、適切な教材についてアドバイスがあった」4.36であり、次に低いものは「Q15 教員と臨床指導者の連携は取れていた」4.37、「Q14 臨床指導者は、話しやすい雰囲気を作っていた」4.48であった。</p> <p>授業アンケートの結果から、老年看護学実習の目的・目標とする内容の学修ができ、学生の充実感や達</p>					

成感が比較的高いと評価できる。しかし、臨床指導者との連携や参考文献等のアドバイスについては、今後の課題として捉え検討していく必要があると考える。

これからの授業に対する目標

臨床指導者との連携等については、年度開始時の実習打合せ会や実習開始前に十分に話し合う時間を持ち、学生に対する学習支援方法を共有できるようにしていく。

老年看護学実習は、介護老人福祉施設や実習病院の実習期間中に図書館の図書資料利用が十分にでき難いという環境面の課題もあるため、実習開始前の準備期間に参考文献等の指導を強化していく。

学生への要望

老年看護学実習は4週間の期間に、病院だけでなく介護老人福祉施設やデイサービスセンター等の多様な場で実習を行います。各実習の場で何をどのように学ぶのか、つまり自分はどのように行動するのかを良く考え、主体的に取り組むことを期待しています。また、実習で体験したことを振り返り、高齢者の健康や生活について理解を深め、より健康的でQOLを高める看護について考察していきましょう。

科目名	小児看護学実習	科目責任者名	湊田 明子	対象・開講時期	3年生・通年
-----	---------	--------	-------	---------	--------

実施状況

2週間という短い実習期間であるが、全員が受け持ち患児の看護過程を実施し、目標を概ね達成できた。ほとんどの学生が2週間継続して受け持たせていただいたが、今年度初めて8A病棟では学生2名で1人の患児さんを受け持たせていただいた。2名で担当することで学生が看護観の違いを感じながらも、それぞれの問題点で看護過程の展開は行っていた。

また、事例報告会などを通して、受け持ち患児以外からも小児の成長発達や小児看護の特徴を学んでいた。今年度の国家試験でもグループ全体での学びとしたことが活かせる事例があった。

欠席もなく充実感を持って、楽しさを感じる学生もいる一方で、実習への取り組む真摯な態度への課題が残る学生もいた。体調について事前の報告が出来ていない学生もいた。

今年度より評価表の変更を行い、具体的な場面での評価が行いやすくなったと考えている。

今年度から実習時に教員を1名増員したことで学生への指導が手厚くできたと考える。今年度は6Bが中心であったが次年度は状況を踏まえ8A病棟でも指導ができるよう検討していく。

記録に関するヒヤリハットが2件(8A1件、6B1件)あり、それぞれの病棟で各学生、指導者、教員で振り返りを行い、さらに事例報告会の後に全体にも注意喚起した。

教員自身の授業評価

授業アンケート結果から、「教員が2名配置されていたこと」「個別相談の時間が設けてあることで不安なく看護過程の展開ができた」「指導者、病棟のみなさんも優しく教えて頂けた」などが、意見があった。〈改善すべきところ・提案〉として、事例報告会への説明や講評に対する希望が多かった。実習初日と前日にも説明を行っているが、今後は理解度を確認していく。その他の意見として、「午後も関わりたい」という意見もあったが、現在のスケジュールでも実習計画次第で関われる状況であるため、可能になるような実習計画が立案できるよう指導していく。

また、ヒヤリハットはあったものの、「個人情報の取り扱いについて考えるきっかけになったので、次の学生にも伝えてほしい。」という意見が聞かれ大切な学びとなったと考える。「カンファレンスの機会を増やしてほしい」という意見に対しては学びの共有ともなるため確実に実施できるようにしていく。

授業評価のポイントでは「Q11 教員の指導は理解しやすかった」、「Q13 教員は話しやすい雰囲気を作っていた」、「Q20 学生の日々の努力、気づきや学びを認めてくれた」が低く、もっと評価してほしい、もっと認めてほしい、話しやすさや学びやすい雰囲気ではなかったという意見があった。それが学習目標の達成の低さにも起因すると考える。そのため、貴重な意見として真摯に受け止め、子どもと接したことがほとんどない初学者であることを今まで以上に意識しながら指導し、一人ひとりが達成感を感じられるよう上記の評価を活かし取り組んでいく。

これからの授業に対する目標
<p>子どもに接すること自体に慣れていない学生が安心して実習に臨めるように支援していく。また、看護展開するうえで、個別の指導も必要となる場合は1週目の早い時期から学習状況の状況を察知し指導者と連携を密にし、目標達成できるよう支援していく。</p> <p>今後も病棟の見学や合同カンファレンスは発達段階の違いによる看護の学びを深めるため、学習効果が高いと考え今年度同様に継続していきたい。</p>
学生への要望
<p>入院中の子どもたちは学生の皆さんが来ることを待っていてくれます。初めて子どもたちに接するときは教員や指導者が一緒に行きますので安心して実習に臨んでください。受け身の姿勢ではなく、自ら学ぶ姿勢で実習に臨むことで子どもとの関係性を築け、よい学びを得ることになります。</p>

科目名	母性看護学実習	科目責任者名	望月 好子	対象・開講時期	3年生・通年
実施状況					
<p>今年度は、NICU 実習指導に非常勤教員を加え3名教員体制で実習指導した。授業アンケート結果の総合ポイントは4.63であった。2単位90時間、1クルー学生数14人～15人で全員が付属病院の6A病棟・NICU・産科外来での実習を実施した。実施の概要は以下の通りである。</p> <p>①事前学習：課題レポートおよび学習ノート作成を春休みの課題として提示した。学習ノートは初日に一度提出させ、内容を確認した後学生に返却し実習に活用させた。また、課題レポートの発表会は例年通り実習初日に行い、実習へのモチベーションを高めることができた。</p> <p>②分娩参加受け持ち等について：全員が経膈分娩もしくは帝王切開に参加できた。また、受け持ち可能な対象が不足することもあったが、臨床側の協力により全員が2日半～4日程度の期間、受け持ちを持ち実習できた。</p> <p>③看護過程展開について：受持ち褥婦について一連の看護過程を展開した。外来における妊婦および受持ち褥婦の新生児については、情報収集とアセスメント、NICUの患児については情報収集・整理という形でそれぞれの対象理解を深めた。学生の個人差はあるが、対象理解は深められた。</p> <p>④NICU および全体カンファレンスなどを通して、生命倫理観・看護観・人間観・母性観について学びが深められた。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>項目別回答では、すべての項目がほぼ全体平均と同等であった。「Q17 安全に関する適切な指導と配慮 4.71」「Q10 実習の受け入れ態勢が整っていた 4.70」「Q11 教員の指導は理解しやすかった 4.70」は、特によい評価を得たので、引き続き同様の取組みをしていきたい。</p> <p>自由記載では、肯定的なコメントが28件あった。一度に14～15名という多人数での実習であるが、病棟の受け入れや指導者の細やかな対応により、できるだけ平等に学習の機会が得られるように配慮してもらえたことや聞きやすい雰囲気やわかりやすい指導が得られたとのコメント等が多くみられた。また、短い受け持ち期間ではあるが、受け持ち褥婦さんへのケアの一環としてのバースディカード作成に関しては、多くの学生が取り組めたことが良かったとコメントしていた。</p> <p>一方改善点については、実習学生数が多いこと、カンファレンス室のスペース不足やPCの台数が少なく困った、パートナーが協力的でなく実習が大変だった、課題の量が多くて大変だった等10件のコメントがみられた。限りある資源の中での実習のなかで、メンバーシップを発揮し、学生同士協力しあいながら、いかにより良い学びにつなげられるのか、学生自身にも主体的に考え取り組んでもらうよう働きかけていく必要がある。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>自己学習時間に関しては、授業時間以外の学習時間は、3時間以上72名、2時間～3時間未満7名、1時間～2時間未満1名、1時間未満0名、0時間0名という結果であった。実習における自己学習時間と</p>					

<p>しては適正な時間がとられていると思われる。</p> <p>出産への参加など貴重な機会をいただいている実習の場で、これからも学生が五感を働かせ、生命観や看護観を深められるような体験と学びを持てるよう臨床と協力しながら進めていく。</p>
<p>学生への要望</p> <p>特に母性看護学実習は、全国的にも実習場確保が難しく、臨床実習できる機会そのものが大変貴重なものとなっている。様々な制約状況もあるが、その中で学生同士のパートナーシップを発揮し、真摯な気持ちで「いのち」に向きあい、自己の生命倫理観・看護観・人間観・母性観を深めて欲しい。</p>

科目名	精神看護学実習	科目責任者名	大貫美奈子	対象・開講時期	3年・通年
実施状況					
<p>「精神の健康問題を抱える対象が、その人らしくその問題解決ができるように関わり、その過程の中で生じる対象の反応や自己の抱いた感情を整理しながら精神看護について学ぶ」ことを実習目的として患者1名を受け持ち、看護を過程的に展開した。また、精神障害者の地域生活支援と他職種連携の実際を見学および体験し、精神看護について幅広い視点での学習を行った。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>精神看護学実習を通して、対象の看護過程を展開するだけでなく、学生自身が自分と向き合えることを重視し、自己理解を深め、看護場面で自己の言動や行動が他者にどのような影響を与えるかを考えられるように指導および助言を積極的に行った。自己の傾向を知ることの辛さや悩みも多くあったが、教員のみならず、実習指導者も親身になって学生と向き合う支援体制を整えて頂けたことで、2週間の精神看護学実習は、個々の学生の知識や技術の獲得に止まらず、人間性の幅を広げる機会にもなったと考える。</p> <p>学生の授業評価アンケート結果からも教員および実習指導者の指導・助言に対する高評価があり、実習受け入れ体制への感謝の言葉も多く書かれていた。学年平均より若干、低い評価となっている「自分で考える姿勢が持てた」と「看護の役割と機能が理解できた」については、指導・助言方法の工夫を検討したい。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>精神看護は、座学での学習だけでは様々な場面を想像できず、大きな不安を伴って実習に臨む学生が多いことは、研究成果でも明らかになっている。そのため、実習初日から学生の持つ緊張や不安をいかに軽減し、伸び伸びと学びを深められる実習環境をつくり出すかということに着目し、実習施設と共に積極的に実習体制づくりを行ってきた。授業評価アンケートにおいて、学生から教員、実習指導者、実習体制への満足感並びに実習時の学習における自己効力感があったとの意見が数多く表出される結果となった。今後も座学では学びきれない精神看護の実際を多く学べるような実習内容を検討すると共に実習体制の更なる充実に向けて各実習施設と協力体制を強化し継続していく。</p>					
学生への要望					
<p>しっかりと実習で体験した内容に座学で学んだ根拠を統合し、精神看護の理解を深めてほしい。</p>					

科目名	在宅看護実習	科目責任者名	新村 直子	対象・開講時期	3年生・通年
実施状況					
<p>在宅療養者とその家族の多様性と個別性を理解し、地域における看護の役割を学習する。実習施設は、東海大学医学部付属病院の外来および入退院センター、訪問看護ステーションさらに保健関連施設としての健康推進室である。これらの実習施設では、ベテランといわれる看護職の実践を見学しながら看護活動に参加する。学生は、看護師の療養者・家族を生活者として捉え、的確にコミュニケーションしている状況に多くを学ぶ。また、病棟、外来、入退院センター、訪問看護ステーションの連携をダイナミックな視点でとらえることができている。さらに、健康推進室では、学生や教職員に対する健康の保持増進に向けての保健活動の視点を学ぶことができている。</p>					

<p>教員自身の授業評価</p> <p>アンケート結果は「Q4 自分にとって新しい考え方、発想がもてた 4.83」「Q8 患者・家族に対する看護師の態度から学べた 4.78」「Q12 臨床指導者の指導は理解しやすかった 4.83」「Q21 社会人として成長できた 4.69」であり、地域における看護職の看護実践を目の当たりにすることで、看護や看護師の活動の重要性や奥の深さまで学ぶことができていた。入退院センターでの実習は 2014 年度までは半日であったが、今年度から 1 日に変更した。これにより、入退院センターの主要な機能である「連携の要」の深い理解に繋がりと、学生の院内・地域連携の仕組みの理解が向上した。一方、「Q6 自分で調べ考える姿勢がもてた 4.58」「Q18 参考文献など、適切な教材についてアドバイスがあった 4.30」などが低値であった。在宅看護実習には、保健医療福祉制度、基礎看護学、成人看護学他の幅広い項目が関連しているので、多くの参考書をあたる必要がある。よって、どのような知識が必要なのか、助言を改善していく。自由記載では①「外来が忙しすぎて学びにくかった」、②「訪問看護ステーションのカンファレンスの機会を増やしてほしい」などの意見があった。実習施設はあくまでも療養者中心にケアを提供する場であるため、学生優先には配慮されていないため、学生は看護師へ、また教員へ主体的な働きかけが求められる。その他、日々の記録に関して③「様式 1（日々の記録）の罫線を引いてほしい、PC で作成したい」などがあった。そのようなしている理由を説明し、協力を伝える必要がある。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p> <p>評価の高かった項目は、この実習で学ぶべき重要事項である。指導者にもこの結果を伝え、多くの学生が充実した実習ができるよう、教育環境を整えていく。それぞれの施設では短期間であるため、早期に学ぶ環境を整える必要性から、学生に「自己紹介カード」を持参させ、スタッフへ自己アピールする機会を持っている。また①②というような意見はあるため、学生のニーズの共有などの各施設の指導者との連携が重要である。実習場の環境から教員は不在なことが多いため、何かあれば教員へ連絡し、主体的に実習に臨むよう学生へ周知する必要がある。③に関しては外部施設を利用する実習故に、プライバシーの保護の観点から手書きで作成すると規定したが、その旨を強調し説明する必要がある。一方、事前学習などの評価の低い項目の理由としては、統合分野という特性から、広範囲に及ぶ事前学習が必要となる点が挙げられる。学習項目の必要性について、すなわち、実習目標から考える予習の必要性について丁寧に伝えていく必要がある。</p>
<p>学生への要望</p> <p>この実習の学習スタイルは看護技術の提供よりも、見学（観察）により学びとることが多い。よって、主体的に間を立て、考え、積極的に発言し、学び取ることが重要である。現時点での自分の看護観を明確にして臨んでほしい。また、実習場所が多岐にわたるので、事前学習は広範囲になるが、丁寧に行うことが大切となる。</p>

科目名	統合実習	科目責任者名	中田 芳子	対象・開講時期	3 年生・後期
実施状況					
<p>基礎看護学実習 I, II から各領域の実習の経験を生かしながら、看護について統合して考え、自らの看護観を明確にする実習である。また、実習方法もこれまでのように受け持ち患者を一人持たせていただく実習ではなく、まず実習病棟の看護チームに入り、看護師と一緒に行動する。その後、その看護チームの中から受け持たせていただく患者を決め、チームの視点から患者を見て看護する実習である。</p> <p>この実習は、看護師として臨床で看護実践をする際に、戸惑いが少しでも緩和できることを目的にカリキュラムに組み入れられた実習でもある。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>項目毎の回答を見ると「Q3 この実習は真面目に意欲的に取り組んだ」が学年平均より低く 4.55、「Q9 この実習において実習要項は役立った」も 4.40、「Q18 参考文献等、適切な教材についてアドバイスがあった」4.40、「Q22 この実習は全体的に満足ができるものだった」4.51 であった。自由記載には「先生によって統</p>					

<p>合実習の捉え方が異なると感じました」「実習教員によって学生への評価方法が大きく異なっていた」「自己の課題について厳しく指導され、統合実習の学びより自己の課題解決に取り組むことを最優先され楽しく感じなかった」があった。複数の学生の意見として「最終日の日々の体験記録を書くよう指示した教員と書かなくてよとした教員がいた」「アセスメントⅠ、Ⅱは任意とすると誤解が生じる」があった。</p> <p>この実習は2011年度から開始となり、全領域の教員が1病棟1名で学生を受け持っている。実習オリエンテーションには必ず全員出席し、振り返りも全学的に行い、毎年微調整しながら学生に不公平感を与えないよう配慮してきた。しかし、統一されていない部分があるようなので、今回の学生の意見をふまえて、統一するところは統一しながら、学生が混乱しないように指導していく。</p> <p>得点の高い項目は「Q5 自分にとって新しい考え方、発想が持てた」4.76、「Q21◎看護観が深められた」4.73であり、この実習の目的が達成されていると考える。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p> <p>2015年度は、実習の目的と目標を一部見直し、より学生の学びの現状に沿ったものに改正し、「看護チームの活動に参加し看護実践能力を高めるとともに、これまでの学修内容を統合して、看護の本質について考えることができる」とした。また、2016年度からは、基本的に2病棟に1名の教員配置とする。3年生最後の実習であり、学生の自主性を大切にしながら、卒業後にもこの実習体験が活用できるように考えたためである。</p> <p>実習の評価で述べた「最終日の日々の体験記録の記載」「アセスメントⅠ、Ⅱの記載の統一」については、教員間で統一し、ガイダンスで説明していく。</p> <p>これらの改善をとおして、最後の実習として学生が意欲的に取り組めるよう改善していく。</p>
<p>学生への要望</p> <p>この実習の目的・目標を十分理解して実習に臨んでほしいと思います。また、他の実習と比較してより一層の自主性が求められます。1年生の基礎看護学実習Ⅰからの学びの蓄積がこの実習で問われることとなりますので、一つ一つの実習をしっかりと組み、看護師の行う看護実践にも関心を寄せて、「看護とは何か」を問い続けながら、実習に取り組んでほしいと思います。そのことが最後の統合実習に必ず生きてきます。</p>